

が進み、苔が生えているものの比較的良く残っている。銘文は像の左右にそれぞれ次のように刻まれている。

天明 八 申 年 (正面右側)

八月 日 (同 左側)

富草地区には今回ここで報告した五基の双体道祖神像のほか、石面に「道祖神」の文字を刻んだものや、自然石を道祖神としてまつたものなども見られるが、これらのものについては後日稿を改め述べてみたい。

四

富草地区には以上報告したように五基の双体道祖神像が造立安置されている。うち二基には確かな造立年代を示す、安永七年(一七七八)と、天明八年(一七八八)の年号が刻まれている。年号のないもの三基の内、図3に示した佐々木善次郎内(内)のものは十九世紀中葉頃の新しい時期に造立されたものと思われる。

図1の鷲巢の像と、図2の門原の像は双体道祖神像としてはかなり古い時期のものと考えられる。周知のごとく下伊那における双体道祖神像で年号のあるもので一番古いものは、阿南町神子谷の享保十七年(一七三三)像である。次いで阿南町新野の明和八年(一七七七)像であるが、享保期から明和期までの約三十年間の空白を埋める元文、寛保、延享、寛延、宝暦期のものがいまだ見出されていない。図1に示した鷲巢の双体像について桶は神子谷の享保十七

年像を報告(下伊那に於ける道祖神の研究、第一冊)をした際、享保と、安永期のほぼ中間の時期に位置するものと述べたが、現在もこの考えは変わっていない。

門原の道祖神像も、像容形態からみて明和、安永期より時代がかなり古くさかのぼるものと考えられ、富草地区で二基の古式の道祖神像を確認することができた。この二つの道祖神像の絶対年代は今後の精査を待たねば結論は出せないが、図1の像より、図2のものが時代が先行するものと考えられる。それは図2の門原の道祖神の方が、面相部及び着衣の彫出形態が、神子谷の享保十七年像に親縁性をもっており、造立時期が近接するものと考えられる。図1に示した鷲巢の道祖神像は像の彫出手法がやや雑で、元禄、享保期に製作された石造の道祖神像や、青面金剛像(庚申像)、馬頭観音像などのように丁寧な製作手法は見られない。しかし明和、安永期以前の時期の造立と考えられる貴重な古式の形態をもった道祖神像である。風化のため亀裂が入っており、地元の方々や、町の関係者ではかつて今後の保護対策をお願いしたい。

下伊那地方における道祖神の調査も四十五年の八月以来集団移住した飯田市大平部落の民俗調査に着手したため、この二年間まったく中断した。今後はこの二年間の空白を埋めるべく下伊那の道祖神の研究を再開したい。

(長野県民俗の会々員)

長篠合戦のあとを訪ねる

温 田 市 助

私は豊橋へ就職して五年にもなるが、この四月やっと長篠古戦場を歩いてみた。

昨年、長篠城趾のノボリ祭(五月第二日曜)に行つて、大たいの地形を頭に入れてあるので、新城駅で降りて山の方へポツポツと歩いてつた。春の野をゆつたりとした気分で、時間の制限なしの一人歩きは私の最も好きな野外活動。

○

老百姓がいるとそれを掴まえて話しこむ、今、こゝらは話がいゝ、銭になる、ミカンが手がかゝりすぎて合わないという話。中学生が三人、つつみで釣りをしているが、パンを喰べたり、キャッキヤッと騒いだり、石を投げたりしていた。私は山の方へ道をとつた。

ここのワラビはどんな風だかと思つて行くのだが、さっぱり見付からない。車道があるので安心してと座に突き当つて、その左の森の中に忽然と大工場が建っていた。門札はないが「從寛謝絶」だ、変な工場、昔ならつてつきり、軍の機密工場というところだ。その先の細道をたどると、これはいけぬ、じめじめした黒松林

であたりを暗くしている。とてもこの奥には戦跡はなさそうなので右の山に分けいった。(ところが後に地図を見ると茶臼山城趾があったのだ) 大たい、どんな密林でも山作業で通つた所は枝が払つてあり、それを進めば里道に出られる。そのあたりには本柳の子が生えていた、手頃なものを抜いて降つて行くともつと枝の張つたやつがあったのでそれと換える。田んぼ道に近くミツバがビッシリ生えていたがもうこわかった。

○

二時間近く歩くと古戦場地域だ、勘ばかりでもと思つて、そこに居た役場職員みたいな人を掴んで「ちよつと教えてほしいんですが」と低くでた。「それなら夏目那次郎さんを訪ねなさい」と大体の方向を指差した。私はツツジの真さかりの家が歴史家のすまいのようにみえたので、そこへ行くと違つた、その家はあの丘の下だから左へ廻つて行きなさいと又教えられたが、私は構わず直線コースで道をふみ分けて行つた。と、そこに川があつて水が深い、昔なら、田んぼの畦を助走路にして一っぱねがが残念、上流をみると敵

が切れている、案の定板橋があつて、夏目家へは一直線だった。大宮という部落でカヤブキ三軒衆のとなつてゐた。こんな時分は家中留守だと思つたが、女の子が出てきた、高校生で勉強していたらしい。おじいさんは老人クラブへ出ているが呼びましようとお車車でとんで行つた。今時、カヤブキは珍らしいが、いかにも古い構えで屋根の小さい割に内庭も部屋数も多い。まもなく、その人がやつてきた。

信州からきたが、少々伺いたいと言つたと「まづまづこれへ」と三疊のハナレへ坐つた。三方書棚で一はいだ。七才の頃から土器を拾うう方に病みつきとなり、考古学から郷土史と独学ですゝみ、若い頃、御家流の書き方を習つて、写したのがこれだと天正時代の検地帖や宗門改め帖をそっくり書きとつてある。仏教書や一時代前の農村指導書をつまつた本だとも大きい。話しが合つて遂二時間もたつたので辞意をいうと、これを差しあげようと彼、半世の苦心の作になる東郷村誌(五十頁)をくれた。七十二才、土から生れ、泥にまみれたその百姓史家は老人クラブへ自転車とどび帰つて行つた。なおこの夏目氏の祖先是飯田にあるとも言つていた。

今度は夏目氏の助言で頭の地図を塗りかえてあるので正確に行けそう。そこで、直線主義の歩き方をやめて、つとめて古い道をとつた。田んぼを越した所に一碑がある、甘利郷左衛門信康之碑というのだ。甘利は佐久地方の名前、それがこゝまで突こんできて斃れた

とは勇敢な武将だった筈。太平洋戦争で我部隊の殊勲者、甘利幸を脳裡にえがいてみた。

そこから赤肌の拡張道路を昇つてゆくとその台地が織田勢の礎さきに惨敗した武田武將の墓のむれがある所。私は「土屋昌次」(家内の実家の祖)の墓が目標だから先へ進むとそこが八束種の町並で墓はずく知れた。本道を三十米もそれた所にそれはかなり大きな塚で、でんと坐つてゐる、上に昌次の墓石があり、右下に顕彰碑が四米位の高さで聳えるという感じで建ててある。車がやつとの道は塚の正面から左にまがつて信玄部落の方へさがつていた。祖先がこんな所まできて鉄砲にやられる、遠征軍の悲劇か、戦争というものはそれがあたりまえ。アレキサンダー軍もジンギスカンの侵攻でも、そして今次戦争でも赤追の向側で、水清き、草を薬して、名前も判らないまゝ朽ち果ててゐる。

○
ていねゐるに忍びずで、表から読み、裏へ廻つて眺めた。墓石は「土屋右衛門之尉昌次の墓」とあり、碑の方は土屋正直氏(土屋惣蔵の長男で天目山潰滅直前駿河へ落ち、後えいが子爵に列した。その弟は信州新野のお寺へ預けられた)が大正六年、之を建つとある墓参はこれで終つたわけだが、近所で車むしりをしていた年寄りにきくと、この向うの牧野病院の先代が大ぶ寄附して建てたというので、私はそこへ寄つてみた。日曜だから居らない筈だが、丁度真

向に孤児寮があつてその耳を病んでいる子をつれた保母がいた。

「電話でたのだから出てきます」という、待つまもなく、院長がでてきた、私はこういう者ですが祖先の墓を手厚く守つていたゝいたおれの気持ちで」とあいさつした。

その人は総白髪で顔が長く、何んとなく高貴な感じの人、きつと由緒ある家柄にちがいない。

○
あれやこれや、知らぬ土地でも道ふみ分けて訪ねて行くと人の心

明治の中学生文集

今村良夫

羽生芳太郎編輯

伊那地方其の他各地の人物及古伝説 第一輯

表紙にこう記した和紙和綴毛筆書きのたゞ一冊がいま、松井卓治先生の許に愛蔵されている。それもその筈、明治三十七年飯田中学にて、生徒百五十人の執筆を網羅して編集し、その判紙版紙二つ折四百枚余を一大冊としたもの、然し、それが松井家に残つたには経緯の年月が介在してゐて、その表紙裏に貼布した紙片の記載が斯うそれを語つてゐる。

この本は知久三伊藤兵三君より
本冊中の一記述者中原へ恵送
されしものなり

伊藤君が飯田荒町の古紙やの店頭
にありしを、屑紙にするのは勿得なしと買
とりし由、その元は、上郷の門司とやら云へる
家より紙屑として買出せしもの由